

臨床実習に対する意識について

—— 実習指導者と学生との相違点から ——

井口 茂¹・中村 律子²・尾崎 英明³

要 旨 臨床実習の在り方を検討する目的で、実習修了後の学生と理学療法士（以下、S V : Supervisor）に意識調査を行った。その結果、学生では実習の目標に「患者との人間関係」、「基本的な検査測定の実施」を、S Vは「医療人としての自覚、態度」を挙げていた。指導形態、指導内容は、両者とも「口頭指導」が最も重要とし、評価判定の形態では、学生は実習指導者による評価を求めており、S Vは教官との合議制を望んでいた。これらより学生は、症例を通じた実践的な知識・技術の理解と応用を求め、S Vは学生の反応・興味などを重要視していた。臨床実習においてはS Vと学生との間に学習に関する目標、課題、方法などの共通認識が必要と考えられた。

長崎大医療技短大紀 9: 31-33, 1995

Key Words : 実習指導者・学生・臨床実習

1. はじめに

理学療法士養成教育3年次の臨床実習は、学内教育で得た知識・技術を実際の臨床場面で応用、経験し理解することを目的としている^{1,2)}。理学療法教育の中での臨床実習に関する議論は、実習の教育目標、指導方法、学生の評価基準など臨床実習の全般にわたり、その内容は臨床実習指導者、教育機関でそれぞれ捉え方が異なっている。

今回、臨床実習に対する意識調査を理学療法士と学生に行い、その意識の違いから臨床実習の在り方について検討したので報告する。

2. 対象と方法

対象は、平成6・7年度臨床実習を修了した長崎大学医療技術短期大学部理学療法学科学生37名と長崎県理学療法士会会員265名（以下、S V : Supervisor）の内、回答が得られた154名の合計191名である。回答が得られた理学療法士154名中、実習指導者として関わっているものが45名であった。アンケートの内容は、①臨床実習の目標、②実習指導形態、③指導内容、④学生評価等に関する項目とし、該当する意識について最も当てはまるものを記入してもらい、学生とS Vで検討した。

3. 結 果

1) 臨床実習の目標について

I期目は、理学療法評価に関する実習が主であり、それを反映し、「基本的な検査測定の実施」をあげたもの

が学生19名（51.4%）、S V58名（39.5%）と最も多かった。次いで6名（16.2%）の学生が「患者との人間関係」を目標とあげたのに対して、S Vでは「医療人としての自覚・態度」「疾患の理解と情報収集」がそれぞれ19名（12.9%）であった。

II期目では、理学療法評価から訓練の実施という一連の流れを体験することが主である。

学生、S Vとも「問題点の抽出、P T計画立案」がそれぞれ20名（54.1%）、54名（37.2%）と最も多かった。次いで学生では6名（16.2%）が「患者との人間関係」をあげていた。

III期目は、臨床実習のまとめと捉えられている。学生では「患者との人間関係」11名（29.2%）、「学内知識・技術の応用」10名（27%）の順で多かった。S Vでは、「問題点の抽出、P T計画立案」36名（25%）、「学内知識・技術の応用」25名（17.4%）、「基本的治療の実施」23名（16%）の順であった。さらに臨床実習全体を通しての目標をどのように捉えるかについては、学生では「問題点の抽出、P T計画立案」と「患者との人間関係」が両者とも9名（24.3%）と多かったのに対して、S Vでは「医療人としての自覚・態度」33名（23%）と最も多かった（図1～4）。

2) 臨床実習の指導形態について

指導形態で重要と思うものは、両者とも「口頭指導」がそれぞれ20名（54%）、55名（37.7%）と最も多かった。次いで学生では「症例検討会」が7名（18.9%）、S Vでは「ケースレポート」36名（24.7%）で多かった。

1 長崎大学医療技術短期大学部理学療法学科

2 昭和会病院リハビリテーション科

3 長崎労災病院リハビリテーション診療科

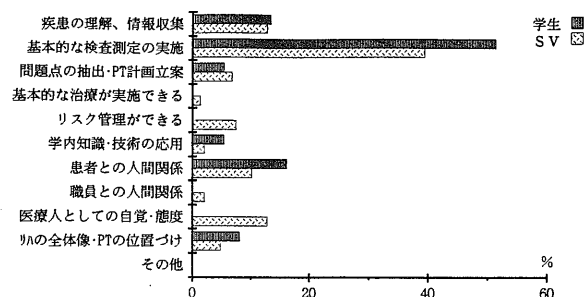


図 1. I 期目の目標

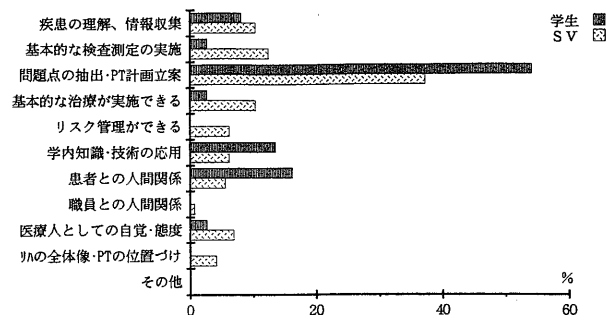


図 2. II 期目の目標

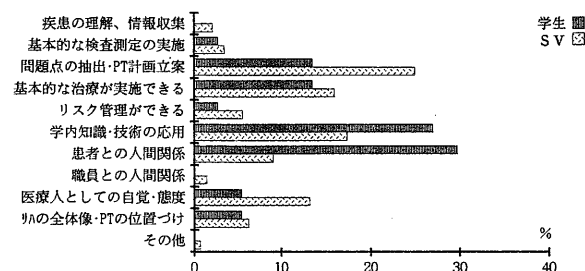


図 3. III 期目の目標

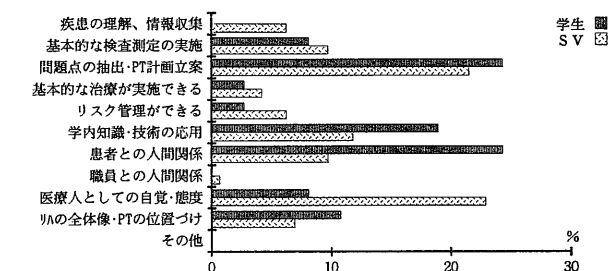


図 4. 全体的目標

実際に適切であった指導形態でも、「口頭指導」が学生 15名 (41.7%), SV 54名 (37%) と多かった。次いで、学生では「ケースレポート」, 「デモンストレーション」の順で、SVでは、「症例検討会」, 「ケースレポート」の順であった (図 5, 6)。

3) 臨床実習の指導内容について

実習で重きをおくべき指導内容は、学生では「実習に対する積極性」, 「患者・スタッフとの人間関係」がともに 11名 (29.7%) で多かった。SVでは、同様に「実習

に対する積極性」が 56名 (37.6%) で最も多かったものの「検査・治療技術の習得」は 13名 (8.7%) と少なかった。

実際に指摘された、または指摘した指導は、学生、SVとも「実習に対する積極性」が多く学生 24名 (53.3%), SV 60名 (41.1%), 次いで「知識不足」学生 15名 (33.3%), SV 40名 (27.4%) の順であった (図 7, 8)。

4) 実習評価について

学生は「問題解決能力」, 「治療態度」での評価を求め

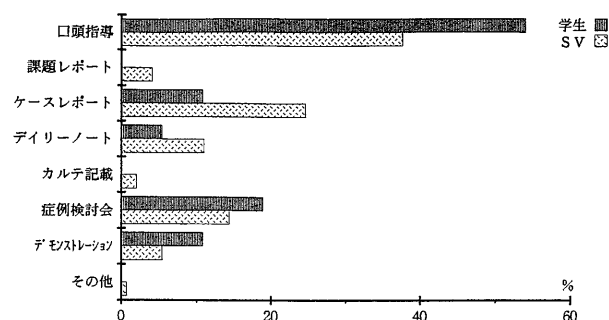


図 5. 重要と思う指導形態

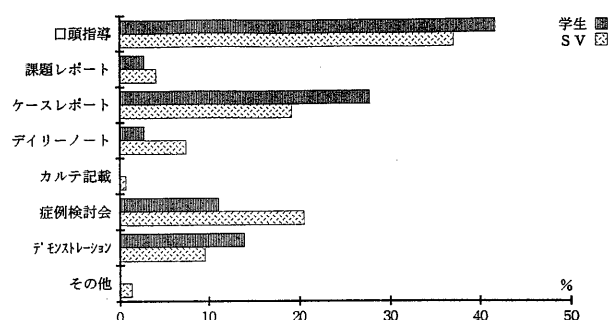


図 6. 効果のある指導形態

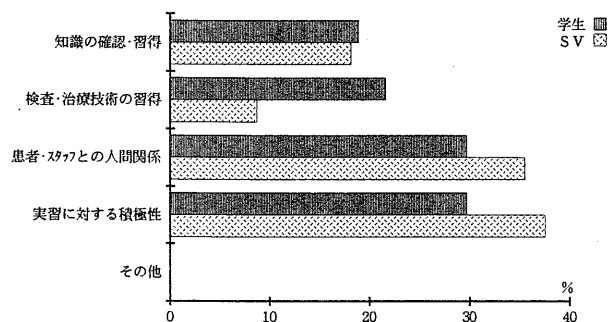


図 7. 重きをおく指導内容

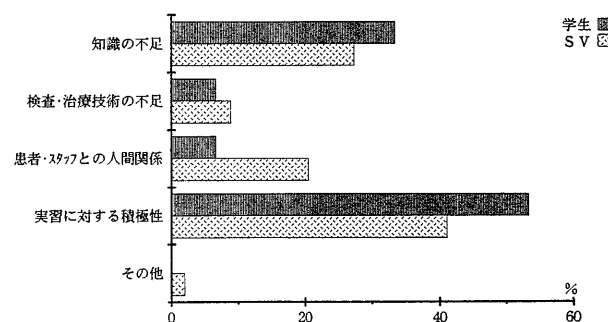


図 8. 指摘した指導内容

ており、それぞれ19名 (52.8%), 16名 (44.4%) と多かった。SVは、「治療態度」81名 (52.6%), 「問題解決能力」41名 (26.6%) を評価内容にあげていた。しかしながら、「知識の豊富さ」、「治療技術」などは評価の内容に重要ではなかった。学生が重視する実習評価の内容は、「治療態度」15名 (41.6%) と最も多く、次いで「問題解決能力」13名 (36.1%) であった (図9, 10)。そしてSVが学生を評価することに関して、ほぼ正當に評価されたと感じているのは36名 (97.3%) であった。

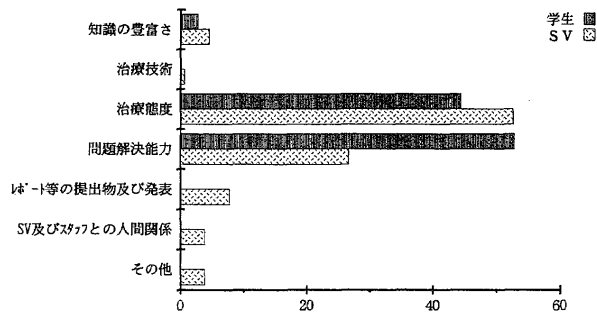


図9. 重視すべき学生評価

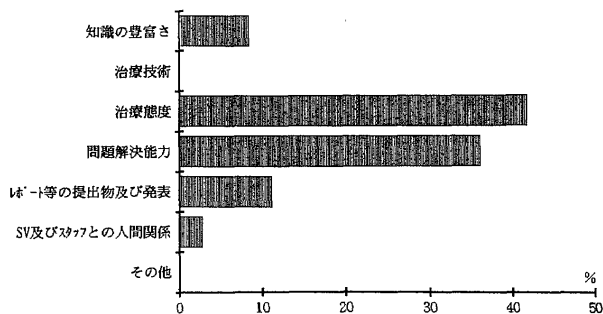


図10. 重視された学生評 (学生)

5) 評価判定の形態について

学生は、SVによる判定を最も多く12名 (51.7%) 希望しているのに対して、SVは90名 (60.8%) が教官との合議による判定を希望していた (図11)。

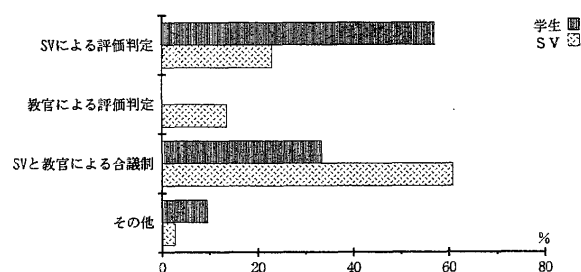


図11. 望ましい評価判定の形態

4. 考 察

臨床実習などの学習目標を定めるに当たり、学生が学ぶものには、1. 認知領域、2. 情意領域、3. 精神運動領域があるといわれている²⁾。具体的には、認知領域

は知識とその理解、情意領域は反応・態度・興味、精神運動領域は行動、技術の実践などである。したがって臨床実習の形態がⅠ～Ⅲ期と分類されていても各期の目標は、各領域すべてについてあげられ、また学習者と教育者の間で共通であることが望ましい。

今回、得られた学生の実習目標は、Ⅰ期～Ⅲ期で「基本的な検査測定の実施」、「問題点の抽出・PT計画の立案」、「学内知識・技術の応用」が多くあげられ、学内で得た知識の統合と応用や実践に関することが主であった。一方、SVでは学生同様に「基本的な検査測定の実施」、「問題点の抽出・PT計画の立案」を主な目標としていたが、「医療人としての自覚・態度」もその目標に上げられており、知識・技術とともに、学生の理学療法に対する興味、態度を重要視している。

指導形態では、両者とも「口頭指導」を重要とし、学生はさらに「デモンストレーション」などの具体的指導を求めている。ここでも理学療法の実践に関する指導を求めている。

指導内容では、学生・SVとも「実習に対する積極性」を重要としていたが、上述した実習の目標、指導内容から考えると学生は、具体的治療や訓練などの行動的な積極性を重視し、SVは学生の反応・興味をも加味した積極性を重視していることが伺われる。

さらに、実習評価においても学生では、実習全体を通した問題に対する解決能力の評価を求めている。SVは学生の反応・興味を学生の態度から評価すべきと考えていることが伺われる。そして学生とSVの評価判定の相違は、学生の反応・興味という情意領域の評価をSV個人が適切に判定できるかどうかという疑問を抱いているものと思われた。

今回の調査から学生の臨床実習に対する意識は、より実践的な知識・技術などを求めている。SVでは学生の反応、興味などの情意的側面を求めている。

臨床実習は、学内教育とは異なる体験学習として位置づけるべきであり、有効な学習を行うためには、教育に携わるSVと学生の間で知識・技術、課題に対する反応、興味、実践などの共通認識が必要であると考えられる。

参考文献

- 1) 臨床における教育方法をどう改善していくか：林茂，理・作療法，15，407-411.
- 2) 臨床実習における問題点—学生評価のパラッキと実習継続性について—：宮下智他，理学療法学，Vol18，No5，503-511.
- 3) 臨床実習教育の手引き第3版：社団法人日本理学療法士協会